「桜校長」高松祐一をめぐる桜

細川呉港（会員）

（思川桜）

① 佐野藤右衛門と牧野富太郎

高松祐一（昭和十三年生まれ、八五歳）この人を紹介するのはなかなか難しい。栃木県宇都宮の中央女子高等学校の先生をしながら、桜に入れ込み、さまざまな「桜ドラマ」をつくってきたからである。生家に近い羽黒山の麓にあった野口雨情の晩年の家の庭から、ひときわ変わった美しいしだれ桜を発見。日光植物園の久保田秀夫（研究員）に持ち込んだ。これが後に新種の「雨情しだれ」となる。また東京の成城学園にいた水上勉の庭から、「太白」に似た白い大きな花の桜の枝を持ち帰り、「水上桜」と名付けて高校の庭に植えた。それが縁で水上が学校に講演に来てくれることになった。また久保田秀夫が小山（おやま）市の修道院の墓地から作出した新種「思川桜（おもいがわざくら）」を小山市の「市の桜」として登録するよう運動もした。

「桜校長」高松祐一は国語の先生であるとともに詩人、文学者でもあった。のちに校長になる。その歩んだ道はまこと教員らしい、地道に、ひたすら自分の学校と宇都宮、ひいては栃木県のためにつくしてきた生涯である。それに文学に精通している。人を見る目が極めて深い。人間の機微を知っている。取りあえず桜だけを中心に彼の人生の歩みを紹介しよう。

高松祐一は生まれたときから身近に桜があった。明治四十一年宇都宮に第十四師団ができ、師団司令部と歩兵第五十九連隊、歩兵第六十六連隊、野砲兵第二十連隊などと、宇都宮駅を結ぶ広い「十間道路」が市内を貫通して造られ、道の両側には桜が植えられた。高松が小学生のころ桜は最盛期、毎年行われるお花見は、それはそれは賑やかであった。

今では、工場の誘致や、都会の大企業を町に呼ぶことが「町起こし」の定番となっているが、そのころは町に師団を誘致することが、当時の町起こしの一番の目標だった。前に拙文でも書いたように、越前高田も、第十三師団を町に呼ぶことに町長が奔走した。そ

して師団の周囲（高田城）に桜を植えた。いまでは夜桜百万人といい、夜桜では日本一という名所になっている。

宇都宮の市内の2キロに及ぶ十間道路に、千本の桜、ソメイヨシノを植えようと提案したのは、鮫島重雄師団長（陸軍中将）ということになっている。そのころは師団長といえば子どもたちのあこがれの人であった。宇都宮市長を始め河内郡の郡長も協力して桜を植えた。

高松少年の家は、その軍道のすぐそばにあって、子どものころから花見の季節は盆と正月が一遍に来たようなものだった。たくさんの露店が出て軍道は人であふれ、サーカス小屋や、お化け屋敷のようなものまでできた。大きな樽の中でオートバイがくるくる回る曲芸もあった。休みの日は少年たちは一日中桜の軍道で遊んだのである。道の両側から桜が覆いかかりまるで花のトンネルのようだった。

昭和四十三年（一九六八）高松は宇都宮中央女子高等学校に国語教師として赴任、ちょうど三〇歳であった。そのころからいろいろな桜の本を読み、桜に関する新聞記事を注意して読んだ。その中に特別高松が感動したのは、長年牧野富太郎と付き合いのあった京都の桜守、佐野藤右衛門（十五代、桜守二代目）の話であった。

佐野藤右衛門は、言うまでもなく京都で代々続いた植木屋。もとは仁和寺の舎弟だったらしい。十四代目から主として桜を育てるようになる（現在の藤右衛門は十六代、桜守三代目）。

十四代藤右衛門は大谷光瑞の命を受けて、全国にある歴史やいわれのある桜や、名だたる桜を求めて枝を分けてもらい、京都の自分の桜畑に持って帰り、接ぎ木や接ぎ芽をしてその種が絶えないように努めた。息子の三郎、五郎に、植木屋としての仕事を任せて、全国の寺や、庭園、神社などを何年も行脚したのである。その執念は並々ならぬものがあった。何しろ、門徒が何百万人もいる浄土真宗本願寺派第二十二世法主のお墨付きを持って全国の寺を回ったのだから、寺も神社さえも協力を惜しまなかった。

十五代藤右衛門・桜守二代目（三郎）は、父親の跡を継ぎ、やはり名桜を集め、また父親の集めた桜を育てた。また大谷光瑞から、中国からヨーロッパにつながる鉄道を想定して、その沿線に桜を百万本植える計画を聞き、苗木の大量育成に励んだ。昭和十六年（一九四一）には軍の仕事で、上海に2千本の桜を植えに行ったこともある。

昭和十九年、折から戦争が激しくなり、食糧がひっ迫したとき、軍から強制的に食糧増産を迫られ、せっかく植えていた桜10万本のうち3万本を寄付、残りは切り倒した。ただし先代が集めた名桜のうち70本だけは密かに残した。「桜を切るのも国のため、（名桜を）残すのも国のため」と藤右衛門は言ったという。

また十五代藤右衛門は、陸奥の国の塩釜桜の蘇生をしたり、京都御所の左近の桜を接ぎ木で残したり、接ぎ木した金沢兼六園の菊桜が枯れたのち、再び穂木を育てて移植したりした。晩年は、財団法人「日本桜の会」の評議員を務め、日本画家、堀井香坡の１７５種の図譜である『桜』（一九六一年）を刊行、『桜花抄』（七〇年）、『桜守二代記』

（七三年）などの手記も本にしている。

その十五代藤右衛門は牧野富太郎と親交が厚く、牧野は桜畑のある広沢の池の畔にある藤右衛門の茅葺の家に、何度も足を運び、何日も泊まって桜の話に花を咲かせた。

昭和三十一年暮れ、牧野は病床にあった。九五歳だった。藤右衛門は京都から列車で上京し東京の牧野の自宅に見舞う。藤右衛門が訪れたとき、牧野は寝ていたがそのうち目が覚めて、藤右衛門を認め、弱々しい声で言った。わざわざ京都からよう訪ねて来てくれたと礼を言い、かつ「佐野さんの鳴滝（なるたき）（京都）の桜畑から出てきた山桜の変わり種はその後どうなった？」と尋ねた。

藤右衛門は持っていた鳴滝の桜の畑で山桜の実生（みしょう）をたくさん育てていた。長い時間をかけて、より良い桜を咲かせるために、選別を繰り返しては種子を蒔くのだ。桜の種子を蒔き、花を咲かせてから実を採り、また種を採る。気の遠くなるような話だ。親の代から何十年も続けている。その1万本の中から、色のやや赤い、八重の変わり種が出てきたのを牧野はよく知っていたのだ。山桜は本来一重なのに、これは花びらが多いものは15枚、旗弁（きべん）は2、3個あった。つぼみは濃い桃色、花は薄い紅色である。

「はい、元気で育っています」と藤右衛門は答えた。

「そうかそれはよかった。あの桜はな、あんたと先代の藤右衛門さんと二代かけて長い間桜に打ち込んできた、その努力に対して、天からの贈り物じゃよ。これからはその桜を《佐野桜》と呼びなさい。私が名付け親じゃ」。

藤右衛門はびっくりした、自分は一介の植木屋である。自分の名前の付いた桜なぞ、考えたこともなかった。めっそうもない。しかしここで言い争いはできない。ベッドの中の弱った牧野の顔を見ているだけで、藤右衛門は目の前で、はらはらと涙を落としたという。長い付き合いの牧野富太郎の、佐野藤右衛門親子に対する最後のプレゼントだった。牧野はそれからわずか27日後にこの世から消えた。

この話を、高松祐一は新聞で読み、感激した。それですぐに京都に行き、佐野の桜畑を訪ねた。そして何とかその「佐野桜」を分けてくれと頼んだのである。突然の知らない人の訪問に佐野は驚いたが、熱意にほだされて数少ない苗木の中から「佐野桜」を1本贈呈した。高松はその苗を大事に宇都宮に持ち帰った。そして翌年、新たに赴任した宇都宮中央女子高等学校の庭に植えたのである。桜好きの高松にとって、宇都宮中央女子高等学校は好都合だった。もと宇都宮第十四師団が、大正の軍縮の後、廃止になり、練兵場の南にあった歩兵第六十六連隊と五十九連隊の跡地のうち、西側の六十六連隊の跡が栃木師範学校となり、さらに、宇都宮中央女子高等学校となっていた。何と敷地は2万坪もあった。桜を植えるところはふんだんにあった。

高松はまた昭和四十四年と四十五年の卒業生の記念植樹の費用を2年分貯め、佐野藤右衛門のところから30本の桜を購入。その後財団法人「日本花の会」の援助で桜の品種をどんどん増やしていった。そのようにして宇都宮中央女子高校には少しずつ桜が増えていっ

たのである。しかも桜の好きな高松である。ソメイヨシノはかつて軍道の桜の名残と思われる古木が校庭の角に1本あったが、後はみな珍しい桜ばかりを収集した。一時は百種、150本もあった。これだけの種類の桜が1か所にあるところは全国でも少ないと思われた。

昭和六十年（一九八五）には「日本さくらの会」より「さくら功労者」として学校が表彰を受け、美智子妃殿下よりお褒めの言葉を賜った。中央女子高校は、「桜の学校」として全国的に有名になったのである。

高松はその後、栃木県下の佐野市に、「佐野桜」を市の花とするよう佐野藤右衛門と、牧野富太郎の逸話を書いて働きかけたが市役所の反応はなかった。当時、佐野桜は栃木県ではあまり知られていなかった。高松は京都から持って帰った桜を、もちろん宇都宮中央女子高校に植え、さらにそこから増やして佐野市文化協会にも数本送っておいた。その桜をさらに佐野高校の実習助手の人が、接ぎ木をして少しずつ増やした。のちに分かったところによれば、佐野市文化協会設立五周年記念には、佐野市の田之入公園に何と39本の佐野桜が植えられていた。少しずつ、佐野市民が、「佐野桜」に関心を持ってくれることに高松は喜んだ。

宇都宮中央女子高校の「佐野桜」は高木となり、今では東京の神代植物公園にも、北海道松前の桜見本園にも、全国あちこちに植えられている。牧野富太郎と代々続いた桜守、佐野藤右衛門の涙の桜である。

② 思川桜（おもいがわざくら）と久保田秀夫

もうひとり桜に入れ込んだ先生がいる。日光植物園の久保田秀夫である。

長野県塩尻の片丘小学校の校有林・庫裏平（高ボッチ）で桜の新種「片丘桜」を発見した久保田秀夫は、小学校教員。その後松本に転勤したが終戦を境に、日光の植物園に転身した。それまでにも、南アルプスでサンプク・リンドウや、クボタ・テンナンショウなどの新種も発見していた。

久保田秀夫は大正二年（一九一三）生まれ。昭和八年、長野市の長野師範学校の時代、傍らにあった長野聖公会（せいこうかい）の聖救主教会に通い始めた。日本でも最も古い赤レンガの趣のある教会だった。日本聖公会はイングランド国教会より起こった宗派で、カソリックとプロテスタントの中間のような教会。社会とのかかわりを重視し、さまざまな奉仕活動をしている世界的な団体である。日本では立教大学や桃山学園、清里のキープや大磯のエリザベスサンダースホームなどにかかわっている。

久保田は昭和二十三年、日光に来て、翌年日光の聖公会の真光（しんこう）教会の教籍に入っている。東京大学付属の日光植物園で研究と仕事をしながら、教会に通った。教会はジェームズ・ガーディナーのつくった石造りの重厚な建物で、明治八年から礼拝が行われたといわれている。

この教会に、栃木県南部の小山（おやま）にある小山修道院の桜井健という司祭が月に2回ほど説教に来ていた。久保田は桜井司祭とすぐに親密になった。そして小山修道院（のちに日本聖公会小山祈りの家）の話を聞く。その修道院の庭に、墓地があるという。久保田はす

ぐに五歳で亡くなった長男詔夫（のりお）の遺骨をそこに埋葬することにした。小さな墓石の並ぶ、きれいな墓地である。久保田が「片丘桜」を発見したころに、久保田夫妻にとって初めての子どもが生まれる。小さなときから桜の絵を描き、また片丘桜の苗木のまわりに、きれいな花が咲くようクレヨンを埋めたという逸話を持つほど、桜の好きな子どもだった。夫妻はとりわけ詔夫をかわいがったが、突然流行の疫痢にかかって亡くなった。五歳だった。国立科学博物館の大井次三郎がわざわざ片丘桜の学名に「ノリオイ」と、久保田の子どもの名を入れてくれたのはそのためである。

久保田は何度か、小山修道院の我が子のお墓にお参りに行った。小山市の真ん中を思川（おもいがわ）が流れていた。その河畔に修道院があった。その墓の周りに珍しい「十月桜」が植えてあった。

小ぶりな花だが十月とそして春にももう一度、年に2回咲く八重の桜だった（同じ仲間の冬桜は、一重である）。

昭和二十九年（一九五四）ころ、あるとき久保田は亡くなった息子の話を桜井司祭に話し、かつその墓の周りにある「十月桜」の種子が実ったら、拾ってきてもらえないかと、頼んだ。桜井はすぐに了解し、しばらくして日光の教会に3粒の種子を持ってきてくれた。

久保田は喜んで、その3粒を庭に蒔いた。やがて芽が出る。そして5年が過ぎた。3本はそれぞれ花を咲かせたが、そのうちの1本はほかの2本とは違った花が咲いた。それが驚いたことに親の「十月桜」とは似ても似つかない、美しい華やかな桜だった。「十月桜」が白っぽく小輪八重なのに対して、花びらの数は少ないが花の大きい中輪半八重、それに花がかたまって咲くので美しく見えた。花の色は薄紅紫、花柄（かへい）は3センチもある。そして花が垂れ下がったように咲く。姿かたちがいい。枝が横に張る。一目で印象的な桜であった。

私も5、6年前こうした発見の経緯を知らないまま、偶然神代植物公園で、小ぶりの思川桜の木を見つけ、その独特な可憐な雰囲気の花を印象深く見た覚えがある。桜は自家受精をしないので、実った種子は必ずほかの桜の木との混血である。だから新種が誕生する。

その後、久保田は、その花を当時は結城（ゆうき）ではなく、小山にあった「日本花の会」の桜農場に持ち込む。そのころの農場長は志村長蔵だった。志村はそれを接ぎ木や挿し芽によって増やした。名前は、修道院の横を流れる川の名前から「思川（おもいがわ）桜」とした。

「雨情しだれ」を日光植物園の久保田秀夫に持ち込んだ、くだんの宇都宮中央女子高校の桜校長こと高松祐一は、久保田から思川桜の謂れを聞き、すぐに小山市に思川桜を市の花にするよう提案した。もちろん学校にも植えた。久保田先生の息子の眠っている小山修道院の「十月桜」から誕生した桜である。思川は、小山市の真ん中を流れる川だし、市民にもこの名前なら親しんでもらえると考えたのである。すると小山市の市の担当職員が、宇都宮女子中央高校に思川桜を見に来て、その美しさに感動し、さらに学校の標語である、お互いが「思い思われる」をモットーに生きる――をそのままキャッチフレーズにして、市の会議にかけた。

そして昭和五十三年（一九七八）めでたく小山市の花として制定されることになった。久保田が、桜井司祭から種子をもらって蒔いてから、ほぼ23年後のことであった。その後思川の両岸、観晃橋（かんこうばし）を中心に3千本、「思川桜」は市内のあちこちに植えられた。当時の大久保寿夫市長のアイディアで、桜の「里親」制度を作った。市民に1本3万円を支払ってもらい、苗木を植え、名札を付けて、以後その桜の面倒をその里親にずっと見守ってもらおうというわけである。この方法はその後各地で実施された。荒川の土手の桜の復元を目指している江東区も、また台北の慶泰大飯店の裏の中吉公園でもこの方法で桜を増やしている。私自身も、栃木に行く途中、偶然に、思川の河川淵で、桜並木を見た。今ではわざわざ小山市の思川桜を見に来る桜好きの人も増えた。

③「四季桜・花しずく」と「四季桜・花宝」

「桜校長」こと高松祐一にはまだまだ桜に関するエピソードが多い。

高松先生はもちろん酒がお好きであった。ある日のこと、いつものようになじみの居酒屋で酒を飲んでいると、自然と話が桜のことになった。何しろ、自分の勤務している学校の校庭に、150種類もの桜を植えた人である。桜に関して知らないことはなかった。

もともと宇都宮には、「四季桜」という酒があった。地元の宇都宮酒造という酒屋が以前から造っている酒である。だがこれがなかなか売れなかった。客は越後の酒ばかりを注文し、四季桜は店ではなかなか出ないのだという。売れないときは樽ごと、秋田とか別の酒屋に売らなくてはならなかった。多くの酒屋はそうして売れる銘柄の酒屋に樽ごと売るのが当たり前だった。これを「桶売り」「桶買い」と言う。四季桜は、明治四年（一八七一）の創業だから、関西の老舗のように江戸時代から続く酒屋ではなかったが、三代つづいた地味な地元の酒屋であった。実はその日、高松は初めて四季桜を飲んだのである。

高松に言わせれば、宇都宮と言わず、栃木県、茨城県の酒はうまくなかった。「栃木、茨城、駄酒の産地」だという。米が悪いのか、あるいは造り方に問題があるのか、それは分からない。

多くの酒屋もそうであるが、宇都宮酒造の酒は、冬、農閑期に越後とか、南部（岩手県）から杜氏（とうじ、とじ）が来て、酒を仕込む。麹づくりから、酒の発酵までを専門に請け負う人たちである。今はだんだんそういう人たちがいなくなって、自前で酒を仕込む醸造所も多くなっているらしい。

お酒ではなく「四季桜」という桜が本当にあるのを知っているかと、高松は居酒屋の周りの客に聞いた。しかし誰も知らない。知らないのに飲んでいるのかと、高松は思った。「《四季桜》の醸造元、今井源一郎さんなら知っているだろう」と誰かが言った。「いや宇都宮酒造だって知らない」と言う人も。

そこで、高松先生は後日、宇都宮酒造に電話を掛ける。自分の名前と身分を名乗り、本当の「四季桜」を知っているか尋ねた。だがやはり知らなかった。

宇都宮酒造の社長は今井源一郎。偶

然に、高松と同じ年齢だった。高松は宇都宮高校、今井は作新学院だった。

「私の勤めている宇都宮中央女子高の校庭には四季桜があります。見においでになりませんか」と高松は誘った。

するとすぐに、今井源一郎は、杜氏を連れて見に来た。今井も長年「四季桜」を看板に酒を造っているのに、本物の四季桜はまったく見たことがなかった。代々造ってきたから、そういう名前の酒だとしか考えたことはなかったのである。

「四季桜はね、夏を除いて一年中咲く桜なんですよ。特に秋から冬、そして春も花数が多い。花は中輪の一重で、なかなか清楚な美しさがある。エドヒガンと豆桜の種間交配ということになっている。愛知県豊田市小原には四季桜公園というのがあって秋に行くと紅葉の赤と、桜の白が一度に交じって見え不思議な光景を見られるらしい。四季桜祭りが観光の目玉になっているんです」と高松先生は説明した。

それ以来、宇都宮酒造の今井源一郎社長と高松先生は一緒に酒を飲む仲になった。2人は意気投合した。高松は桜だけでなく、酒に関してはかなりの酒豪、全国の酒の味は知っているつもりだった。あるときは、女房同伴のふた家族で、宇都宮酒造に毎年来る越後の杜氏、番場光栄さんの実家に泊まりがけで行った。越後長岡の有名な「長岡花火」を見に行ったのである。杜氏の番場光栄さんは長岡の来迎寺というところにいて、日ごろは米を作り、農業をしているが、毎年11月ごろ、長岡に雪がちらつくころになると何人かの郷党をつれて宇都宮に来る。そして皆で、蔵に泊まる。蔵人といわれるゆえんである。蔵に寝泊まりしていると、夜中でも、四六時中、酒の醸し具合がチェックできた。途中、正月だけは郷党たちは一度長岡に帰すが、番場だけは残った。そして冬「甑倒し」の終わる二月の末まで、滞在する。それが毎年のしきたりだった。

今井と高松と番場の3人が集まると当然のことながら酒の話になった。

「何とか宇都宮でもうまい酒はできないものか」、3人はいろいろ談義をした後で、まず、酒米から吟味した。

酒米にする米はタンパク質の少ない、脂肪分の少ない方がいい。米粒は大きくて磨いたとき、中の白く濁った心白という部分が大きい方がいい。古来、酒造りに使われていた米は「美山錦」とか「出羽燦々」といろいろあるが、近年、一般的には酒造りに適している米は、岡山県で造られた「雄町」で、それを改良した「山田錦」と「五百万石」という品種がある。「山田錦」は兵庫県を中心にたくさん栽培されている。タンパク質も少なく、雑味が少なく、芳醇な味わいに仕上がるといわれている。一方、新潟県で主に栽培されているのが「五百万石」であった。端麗ですっきりした味わいだといわれている。どちらを使うか。これもまた難しい問題である。

今井は「山田錦」を自分の家で代々持っている一町二反歩の田んぼに植え、それで酒を造ることにした。実った米は千粒で26グラムもあり、これを精米機にかけて削れるだけ削った。

また、酒造りには酒母が大切。蒸した米に麹と酵母を入れ、酒母を造る。

このときの仕込み水を、番場は、わざわざ埼玉県の鴻巣（こうのす）まで行って運んできた。酵母の種類もまたいろいろたくさんあって、何を使うかも問題であった。

また酒造りのもとの水は、今井家が代々大切にしてきた敷地内にある井戸だ。鬼怒川の伏流水ともいわれている軟水である。今井と番場は考え得る最上の方法で、かつ、さまざまな新しいことにも挑戦した。

そして出来上がった酒に少しだけ、醸造用アルコールを入れる。このままだと口当たりがきついからだ。醸造用アルコールはいろいろあって、水あめのようにドロドロしたものから、あっさりした液体のようなものまで。どれをどのくらい入れるかで、口当たりが随分違う。昔からの日本酒を飲んでいる人には、むしろドロドロした酒を好む人もいるからだ。こうしてできたのが「吟醸貴酒・花しずく」であった。何ともいえない芳香とすっきりとした味も申し分なかった。もちろん命名は高松であった。

この酒をもって今井は全国の清酒の品評会に出し、並み居る灘や伏見の名酒を抜いてベストテンに入った。まだ吟醸酒というのが一般的でなかったころである。「栃木、茨城、駄酒の産地」という自虐的名言に一矢報いたのである。しかし、この酒はまさに手作りの特上品だから1年にひと樽しか作らない。なかなかぜいたくな限定品だった。

高松はまた吟醸酒「花しずく」のほかに桜シリーズとして、本醸造酒「初桜」、澱（おり）酒・濁り酒「冬の華」というのも命名した。

さらに「花しずく」の吟醸酒の技術を生かして、新しく作られたのが「四季桜・花宝」である。こちらは純米吟醸酒として最後にアルコールを入れない。

ところが、この「四季桜・花宝」が、若者に人気のグルメ漫画「美味しんぼ」に取り上げられた。『ビッグコミック・スピリッツ』で連載されていたもので、テレビ化され、単行本は1億３５００万部も販売されているベストセラーだ。その第４巻と、第56巻で２回も紹介されたのである。２回目は、落ちアユのころに真子や白子でつくる「白ウルカ」とあわせて「四季桜・花宝」を飲むと最高だと紹介された。

「四季桜・花宝」のラベルはもちろん桜の花で、５枚の花びらが大きく描かれている。このラベルは、地元の版画家、川上澄生の筆致に似せて、高松がデザインし、桜の木で木版を彫った。ラベルの紙はやはり地元の烏山和紙を使った。烏山和紙というのは宇都宮の隣り那須烏山の、飛鳥時代から伝わるという和紙で、古来、那須コウゾと那珂川の水でさらした表面のなめらかな、しかし漂白しない薄茶色の素朴な味の和紙。これを手でちぎったように切って使った。最初は蔵人たちも全員で、採色、紙の裏から色を付ける「裏差し」をして、手で一升瓶に一枚ずつ貼った。こちらも年にひと樽の限定品である。

そのうち「花宝」は評判になり、需要が増えて、今ではラベルは印刷し、機械で貼って、四合瓶で売り出している。

「桜校長」高松祐一と、醸造元の今井源一郎、それに杜氏の番場光英が作り出した桜の名前の銘酒である。